

---

---

## 日常史の資料学の課題 ——柳田國男と渋沢敬三に学ぶ——

佐藤 健二

ちょうど正面の看板に掲げられているメインタイトルの「渋沢敬三の資料学—日常史の構築—」に結びつけながら、多方面に展開した今回の報告にコメントしてみたい。もう一つの重要な主題である「渋沢敬三」については、あとであらためて付け加えることとして、ここで本シンポジウムの第1の結び目が「資料学」であるという事実から始めたい。それは、いわば民俗学や歴史研究の共有の基礎であり、本シンポジウムで触れられているデータベースの作成や博物館づくりにも深く関わる。

主題の第2の結び目として意識しておきたいのが、「日常史」である。英語に翻訳されたタイトルでは History of Everyday Life で「life (生活、生命、人生)」という要素が明確に表されているが、おそらく日本語の「日常」のなかにはすでに「生活」という意味が深く染み込んでいる。それゆえ、あえてシンポジウムのイメージを広げるために、聞き慣れた日常の「生活史」ではなく、やや日本語として熟れていない「日常史」という表現を選んだのだろう。しかしながら、いずれにせよ核心は「日常生活の歴史の厚みをいかに把握するのか」という民俗学の創生期からの問題意識である。

第3の結び目として挙げておきたいのが、この資料学と日常史の双方に深く関わる研究材料の「収集」という実践であり、そこには方法の問題が孕まれている。資料としての発見においても、また日常史の発掘においても、「方法論」としてしばしば論じられる見通しを備えた自覚が必要で、その重要な焦点となるのが、データの収集・整理・分類・参照といった複合的な作業領域である。

まず「日常史の資料学」といういまだ確立したとはいえない立場から、今回のシンポジウムの多彩な報告にコメントしよう。

第1に、ここで構想されている資料学の焦点が「生活」にあることを確認する必要があるだろう。それは方法論という以上に、まず資料に対する新しい見方の提示である。

「生活」という言葉で指し示されているのは、ある「場」のもつ特性であり、それは生きている人間の「身体」を中心に組織された空間であり環境であるという特徴をもつ。生物としての人間の身体が中心に存在するものであるがゆえに、特定の文化を超え出る生命としての普遍性をもつと同時に、それぞれの環境に固有の具体性を有していることをも含意する。日常語としての「生活」は、その場において「起きていること(現象)」のすべてを幅広く指示する。ところで、そこで起きている現象とは何か。それは、食べることであり、住むことであり、働くことすなわち労働であり、祈ることであり、次世代を生み出すことであり、死ぬことである。キブルツ氏が最初に学ばれたという仏教学の知識を借りて言えば「生・老・病・死」、生まれ、老い、病み、死ぬという現象が、そこで起こる。クライナー氏がモースの収集の特質として言及された、美しいと認められた「財物」だけでなく、いわば「ガラクタ」までもが属している日常生活の場がそこにある。

すこし注意して考えてよいのは、「史」という言葉が付け加えている時間的な「厚み」である。これは歴史を、年表のような過去の事実の時間の流れとしてではなく、いろいろな要素が混ざり合っている時間の厚みのようなものとして、とらえるのがよいのではないかという問題提起でもある。つまり「持続」のなかで、積み重なり混じり合った意味の構造として、歴史をとらえる。中国の長大な歴史のなかでの農具の発達を「農民の生活空間」の拡大として解釈しようとする曹幸穂氏の見方や、崔順權氏の

「持続的な記録」の試みが必要になってくるのも、それゆえである。

第2に、本日の報告はさまざまな意味で収集の持続や蓄積を重視していると思うが、それはこの資料学が広い意味での「帰納」的な想像力を基本とすることの再確認であった。ここでいう「帰納法」という論点は、鹿野政直が「民間学」の特質の一つとして挙げたものでもある。私自身は、学問の方法論を分類するにあたって、帰納法 (induction) / 演繹法 (deduction) という排他的な二項対立が万能だとはまったく思っていない。しかしながら、方法的な想像力の働きかたの差異を示すものとしては、それなりに役に立つと考えている。

いろいろな説明の仕方があるが、あえていえば「演繹」の想像力とは、人間の言語という道具が固有に立ち上げたものだ。つまり、キーになる概念や基本に据えたカテゴリーの定義や規定の仕方から展開して、現実に向っていく。これに対して「帰納」の想像力とは、身体的かつ経験的なもので、実物から浮かびあがらせていく、現象から掘り下げていく。当然、実物も現象も複数性をもって現れてくることが多いから、比較という作業がここでも必要になってくる。意味の解釈とか、解釈という言語的な実践が関わらないわけではないが、何よりも現象や実物の収集/保存・集積が重要になるし、考察の基礎となるべき実物が重視される。

宮本瑞夫氏が家に受け継いだ映像データや、福岡正太氏の整理分析を進めている音源データの報告は、この帰納の方法の地平が拡大していることを証言するものだ。以前は「実物」は集められたけれども、「現象」は集められなかった。しかし、20世紀になって、映像や音楽、実際の演説が、現象の記録として集められるようになってきた。

そのうえで現代的な資料の特質に対する考察の必要性については、多くの報告が意識していたと思う。とりわけクライナー氏の欧州における日本の文化財やおもちゃのコレクションを作り上げた人びとの話に触れて、「蒐集者」たちの歴史的な特質や個性を考察する重要性をあらためて思った。かつての収集を生み出した人びとを支えた「富」のあり方が変わってきたとして、それに代わって収集や保存を分担するようになった文化庁や博物館などの公の機関は、果たして前の時代の富める人びとの達成をきちんと検討したのだろうか。もっと実物に即して論じられ、意識されてよい。収集それ自体もまた、モノの移動として見る必要があるという印象は、私にも新鮮であった。私の専門の柳田國男の研究でいえば、鶴見和子は『漂泊と定住と』(筑摩書房、1977)において、あらためて移動を担う人たちの重要性に注目したが、山人や毛坊主に注目した初期柳田の先駆的な評価もその後に新たな展開を見せた。曹幸穂氏は中国風車と日本の唐箕の関係があるのかどうかについて言及し、キブルツ氏は札に印刷された図像が、世界を跨いで思いがけなく遠くまで旅をしていることを話題にしたが、そうした文化の移動をいかなる生活をする人びとがつけていったのかは興味深い。

第3に、もうすこし大きな視点で、「資料学」を構築する主体をどう構想するかという論点を提起しておきたい。資料学の構築という言葉は、それほど物々しい学問論としてとらえる必要はない。単純に研究資料についての正確な知識をどう獲得するかという日常的な課題で考えてよいし、さらに言えば、モノや記録についての自覚的な認識を誰が作り上げていくか、行くべきなのか、と言いかえてもいい。

強調しておきたいのは、それを収集し調査する研究者だけが、この知の創造を担う主体ではないという点である。生活者としての「常民」も主体である。中国や韓国では「常民」をめぐるどんな論争があったのか、残念ながら本シンポジウムの主題ではない。しかし1950年代前後の日本民俗学での常民概念論争は、研究対象としての常民は論じて、研究主体としての常民の論じ方においてけっして十分であったとは言えない。さらに言えば、日常史を発掘するための方法として、資料ではなく常民に注目

することが重要だという方法的な視座であったはずなのだが、そうした視座はあまり十分には発展させられなかった。

中国の古代だけでなく日本の近世でも、農具の歴史は農民が作ったという理解は基本的に正しい。同じように常民もまた個人というより、集合的な主体である。主体という概念は、抽象的で独自かつ独立のもののように思われがちだけれども、集団的でもありうることをきちんととらえなければならない。ただ、一つ付け加えておきたいのは「集団」といっても、その生活の場においては一様でなく均質でもないという、これまた当然の、しかしながら大切な論点である。農具や民具のような事物にしても、その具体的な生活環境のなかでみれば、作り手／使い手の違いがある。作り手と使い手の関係をきちんと押さえずに、「集団」や「常民」を論ずるのは、主体の論じ方として観念的である。そして使い手の経験が受け入れなければ、工夫は民具として普及しない。口承や昔話といった文芸の領域にも、話し手／聞き手の差異がある。新しい語句の表現も、場を共有した聞き手の集団によるその工夫の評価や承認なしには、新語として定着しないだろう。

現象や事物の背後に、見えない主体、複数の主体、忘れられた主体のさまざまな役割がある。その忘れられた歴史の発掘こそが、運動としての民俗学の可能性だった。

最初にも触れたが、「渋沢敬三の思想」ともいべきものを探ってきた観点から、いくつかの話題を拡げておきたい。

一つ、渋沢の思想に関わらせてコメントすべきは、人間以外の主体も視野に入れる幅広さである。それは渋沢敬三の「生物学」「動物学」「生態学」的なまなざしにおいて、強調すべき論点であった。農具もまたお札も生活を支えると同時に、その一方で生活を作り上げている主体である。崔順権氏の報告で、生活の道具を集めるだけでなく、道具にまつわる話もきちんと収集していくことが重要だ、という。同じような考えは、渋沢敬三が『民具問答集』（アチックミュージアム編著／発行、1937）のなかで表明している。すなわち「話」もまた生活を作り上げている、たいへん主体的なものであることを意味するのだろう。そのフィールドである地域の村だけでなく、国境を越えた拡がりをも視野に入れて、「モノの生活史」を描いていくのは興味深い課題である。

それは学問の国境をも越えていくことになるかもしれない。キブルツ氏の「お札<sup>ふだ</sup>」の報告を聞きながら、意外にも渋沢敬三が本業としていた銀行業・金融政策の「お札<sup>きつ</sup>」の力のことを夢想した。宗教的な意味をまとった、生活のなかで文字や絵が描かれている紙片の力を考えていくと、ひどく世俗的で経済学的なものと限定的に了解されている「貨幣」のもつ力とも無縁ではなく、じつはどこかで隣りあっていることに気づく。なぜ、この紙片は力をもつのか。

もう一つは、渋沢における「共有」の思想の発展という論点である。アチックミュージアムの主要事業としての出版や「絵引」や「索隠」を含む資料集の編集は、それが共有を作り上げる技術だったからゆえの熱中であつた。そこに現在は、新しいネットワーク技術が付け加わっている。バーチャルな共有地としてのインターネット空間が新たな環境として浮かびあがりつつある。かつての孤立した蓄積としての図書館は、現在はその所有情報の一部が横断的に貫いて検索できることによって、一つの共有地になりつつある。同様の可能性は、映像資料にも、音声資料にも開かれている。曹幸穂氏は、水利技術が一つの村に限られない豊かさを生み出したと指摘したが、今日のインターネット技術は、じつは新しい水利技術でもある。もちろん、新しい水争いもまた起こるけれども。

私自身がかつて論じたことのある「分類」の思想と「索引」の思想という論点も、柳田国男や渋沢敬三が問題提起しながら、後の民俗学の研究者があまり展開させなかった、方法的な主題である。分類の本質は、いかなる関係の軸を設定し、いかに見渡すような秩序をもたらすかであって、ただどう細かく

分けて整理するかではない。多様な形態をどうつなげるか、事物をいかなる配置や関係において理解するか。ただグループ分けをして分類箱に入れるだけでない、意外なものを結びつけ、新たな位置関係を生み出すという機能こそが、じつは大切なのである。宮本瑞夫氏が指摘したアチックミュージアムの『民具蒐集調査要目』（アチックミュージアム編著／発行、1936）というのも、こうした分類／索引の思想から出た、モノを把握する枠組みづくりの工夫だったと思うが、そのようには議論されてこなかった。毀誉褒貶いろいろだが、『郷土生活研究採集手帖』（比嘉春潮編、郷土生活研究所、1934）『採集手帖（沿海地方用）』（柳田國男編、民間伝承の会、1937）から『民俗調査ハンドブック』（上野和男他、吉川弘文館、1974）までにいたる項目設定の功罪も、ここに関わる問題である。